

新幹線北陸延伸をメリットとして活かす観光・まちづくりプロモーション

～ 続々 ふるさとの“意思ある学び”で拓く北信州の未来プロジェクト ～

長野県飯山北高等学校桂蔭会

1. 地域が直面する課題を学ぶ「ふるさとの“意思ある学び”」

飯山北高校の同窓会である桂蔭会では、2007年度から「ふるさとの“意思ある学び”」という地域の次世代リーダー育成の試みにとりくんでいます。地域が直面している現実の問題を調査・研究する課題解決型の学びにチャレンジをしながら、まちづくりを学ぶために必要となる意思(意欲×考え方・学び方)を習得し、まちづくり(地域活性化)について専門的に学ぶ大学(以下、「まちづくり系大学」と略称する)への進学をめざす生徒を育てようというこの試みは、全国的にも他に例のない高校同窓会による教育支援活動として、まちづくり(地域活性化)の関係者の間で次第に注目を集めるようになってきました。この事業が最終的な目標とするのは、大学卒業後は公務員やNPO職員、社会起業家(地域起業家)といった「意思ある人々」として飯山地域に帰ってまちづくり(地域活性化)を主導する、そうした次の時代のまちづくり(地域活性化)を担える人材の育成です。こうしたひとつづくり(人材育成)というかなり成果を出しにくいまちづくり(地域活性化)の試みを、前身となる有志生徒の学習サークル「田舎ブランドを創っちゃおう会」の活動を含めれば、もう10年以上、続けています。

2. ふるさとの“意思ある学び”で拓く北信州の未来プロジェクト

このような試みを続けてきた私共が2012年度からとりくむことにしたのが、「新幹線北陸延伸をメリットとして活かす観光・まちづくり」を総括テーマとする「ふるさとの“意思ある学び”で拓く北信州の未来プロジェクト」です。このプロジェクトは新幹線北陸延伸(新幹線飯山駅の開業)をどのようにメリットとして活かしてまちづくり(地域活性化)をすすめるべきかという飯山地域が直面している最前線の問題にチャレンジする課題解決型の学びであり、初年度の2012年度は「新幹線北陸延伸をメリットとして活かす観光・まちづくり政策」を、続く2013年度は「新幹線北陸延伸をメリットとして活かす観光・まちづくりプランニング」を、また最終年次となる2014年度は「新幹線北陸延伸をメリットとして活かす観光・まちづくりプロモーション」を、それぞれ年次テーマとしてとりくんできました(以下、2012年度の調査・研究活動は「意思ある学び2012」、2014年度の調査・研究活動は「意思ある学び2014」などと略称する)。(一社)北陸地域づくり協会からは2012年度と2014年度の2回にわたり研究助成をいただくことができ、飯山地域のまちづくり(地域活性化)を主導するような調査・研究活動をどうにか展開することができました。深く感謝する次第です。

3. 高校生の「意思」の創発に成功した「意思ある学び2012」

プロジェクトは有志大学生を募集して調査・研究活動を行うローレル夏期大学と飯山北高校の有志生徒を対象に課外授業として実施するローレル文化講座の2編成で実施することを基本型とし、まちづくり(地域活性化)の先進事例に学ぶ見学研修(スタディーツアー)などを合同の学習の場として設定して大学生と高校生の学習交流をすすめるなどして、高校生の「意思」創発に配慮しました。また、ローレル夏期大学には、以前の「ふるさとの“意思ある学び”」で学んで「まちづくり系大学」に進学した卒業生(現役大学生)に参加をしてもらい、よくある「まちづくりごっこ」に終わらせない調査・研究活動となるよう、後輩への指導をお願いしています。

こうした「意思」の創発が多少なりとも上手くいったのが、「意思ある学び2012」です。ローレル夏期大学には2009年度の「ふるさとの“意思ある学び”」の参加生徒で「まちづくり系大学」に進学したHくん(男子)を始めとする3名の大学生が、またローレル文化講座には飯山北高校の1・2年生7名が参加して、飯山市から2時間弱の距離にある新潟県十日町市(越後妻有地域)で開催されていた大地の芸術祭という現代アートの祭典を合同の見学研修(スタディーツアー)として見学し、アートを軸にしたこの地域のまちづくり(地域活性化)がどのような成果を生み出しつつあるのかを学んだ他、

新幹線北陸延伸で北陸方面への利用客の大幅な減少が想定される北越急行(ほくほく線)の問題やJR飯山線の利用促進に対するとりくみについて、十日町市役所に伺ってお話しをお聞きしたりしました。その後、大学生は新潟県湯沢町、上越市へと足を延ばして十日町市と同様のヒアリング調査を行ない、さらに3日間をかけて飯山市がすすめる広域観光連携(新幹線飯山駅に関わる信越9市町村の連携により「信越自然郷」と称する観光圏が誕生した)に参加する市町村を訪問し、9市町村広域観光連携に対するそれぞれのスタンスをお聞きした上で、新幹線北陸延伸(新幹線飯山駅開業)をメリットとして活かす広域観光連携のあり方を調査・研究してもらいました。

その結果、「飯山市がすすめる広域観光連携は連携市町村間の思惑(観光戦略)の違いがあり容易ではない」との現状認識の下、逆に「新幹線の北陸延伸で打撃を受ける十日町市や湯沢町との広域観光連携(地域間連携)にとりくむ必要がある」とし、「アートで魅力的な観光エリアとして注目されている越後妻有地域と連携して、新幹線飯山駅を起点に越後妻有地域へ誘客し、十日町駅から北越急行(ほくほく線)を使って越後湯沢駅に抜ける観光ルート(もしくはその逆ルート)を開発した方がよい」とする提案がなされました。

こうして、「まちづくりごっこ」とは異なる調査・研究活動のあるべき姿を教えられた高校生は、今度は自らの探究活動として旅行プランの立案にとりくむことになり、首都圏からの誘客を想定した大学生の案とは異なるルートで周遊観光プランを考えることになりました。新幹線の時間短縮効果が最大となるのは上越～長野間であることを知った高校生は、北陸地方(富山・石川・福井)から誘客を図るルート設定の方が新幹線北陸延伸のメリットを活かすことになるのではないかと発想し、そこでじゃらんリサーチセンターより提供していただいたデータの分析を基にして「北陸地方から新幹線を使って軽井沢を訪れる旅行客を北信州の酒造場をめぐるSAKEツアーにより飯山地域へ誘客する」とする独自の旅行プランをまとめました。

こうした考えたSAKEツアーは、「意思ある学び 2013」に参加した2年生(「意思ある学び 2012」に参加していた1年生)により信州いやま観光局の旅行商品として改案され、「飯山駅発着! 酒蔵・ワイナリーめぐりバスツアー」として、実際に販売されることになりました。このように探究活動の成果が形になったことは、高校生のモチベーションの向上にきわめて大きなものがありました。後述するように、こうした高校生の「意思」の創発が上手くいくには、幾つかの条件が揃うことが必要とされていますが、中でも大きな意味をもつのが高校生の「社会参画への意欲」を正当に評価し、また高校生が達成感を得て自信を高める後押しをすることだといいます。観光局の「飯山駅発着! 酒蔵・ワイナリーめぐりバスツアー」は「意思ある学び 2012」の成果からすれば、「北陸地方から新幹線を使って軽井沢を訪れる旅行客を北信州の酒造場をめぐるSAKEツアーにより飯山地域へ誘客する」という最も重要な広域観光連携(地域間連携)の視点を欠いてしまった「欠陥商品」ではありましたが(そもそも知名度の低い飯山に直接、誘客を図るのは難しいため、ブランド観光地である軽井沢などと地域間連携を結んで飯山へと誘客するというのが「意思ある学び 2012」の政策提言です)、それでも高校生の「意思」の創発には大きなものがありました。

一方、「意思ある学び 2012」の2年生参加生徒5名のうち3名が自らの探究活動の成果を活かしてAO推薦入試で「まちづくり系大学」に進学したことも、たいへん大きな成果となりました。具体的には彼らに「意思ある学び 2014」では高校生をリードする学生スタッフ(研究補助員)として活躍してもらうことになり、大学に入学して半年も経たないうちから(一般入試で大学に進学した生徒の多くが目標を喪失し、勉学を放棄してアルバイトに精を出すという光景はもちろん今でも決してめずらしくありません)、私共の活動には欠くことのできない貴重な戦力として働いてくれています。

4. 高校生の「意思」の創発に失敗した「意思ある学び 2013」

これとは対照的に、高校生の「意思」の創発に失敗したのが「意思ある学び 2013」、そして「意思」の創発に思わぬ苦勞をしたのが、今年度の「意思ある学び 2014」でした。

「意思ある学び 2013」は(一社)北陸地域づくり協会からは研究助成を受けず、代わりに飯山市の輝く地域づくり支援金による助成を申請したのですが、非公開のため、理由はよく分からないものの私共の申請は却下されてしまい、後に2次の申請が認められて活動の展開が可能となったのですが、支給決定が9月までずれ込んだため、最も重要な夏期休業中の期間は何もできず、この間、高校生のモチベーションは大きく低下し、またチームワークにも乱れが生じるなど、指導はたいへんに困難を

きわめました。「意思ある学び 2013」では新幹線の「開業2年目の危機」というものを想定し(新幹線北陸延伸の1年後となる2016年3月には東北新幹線の函館延伸が予定されており、北陸新幹線の観光需要が大きく低下することが予想されました)、飯山市がすすめる信越9市町村による広域観光連携(地域内連携)の枠組を維持するためにはインバウンド観光により新たな観光需要を創出するしかないと考え(これに失敗すると、大きく減った観光客を互いに奪い合うような状況が生じ、信越9市町村による地域内連携の枠組は崩壊する可能性があります)、富山空港などを利用して韓国、中国東北地方から来日する修学旅行を想定したインバウンド観光のモデルプランを、新幹線でつながる金沢・能登地方との広域観光連携(地域間連携)により創ろうとするものでした。このように、「ポスト新幹線」を意識した一歩先を見通した調査・研究活動の構想であっただけに、このことはたいへん残念でした。次世代のまちづくり(地域活性化)を担う人材の育成につながる高校生の「意思」の創発は、彼ら自身のモチベーションの問題に責任転嫁されがちですが、自治体(市町村)や地域住民が学校と連携をとり、彼らの「意思」の創発を支援していくことが何よりも重要なのです。後述するように、こうした支援のしくみがきちんと構築されている島根県海士町や津和野町、岡山県和気町など先進的な自治体では、地域社会に変革をもたらすような高学歴・高スキルのIターン移住者(以下、ヨソモノと略称します)の獲得にも成功して、高校生など若者の人口流出にも歯止めがかかりつつあります。

こうした失敗を教訓として、「意思ある学び 2014」では「意思ある学び 2012」に参加して「まちづくり系大学」に進学した卒業生(大学1年生)に依頼して調査・研究活動を展開するとともに、再び高校生の「意思」の創発に挑みました。「意思ある学び 2012」と同様の活動展開を考えたのですが、高校生の中でリーダー格になると期待していた生徒が長期欠席になるなど、予想に反して「意思」の創発は難航し、最終的に高校生の参加体勢が整ってローレル文化講座が開催できたのは、新年2月に入ってからのことでした。「意思ある学び 2014」で学生スタッフ(研究補助員)として後輩の指導にもあたる卒業生(大学1年生)も、この間に機会をみて何度か学校を訪ずれて「意思」の創発につながる話しをしてくれたのですが、なかなか参加者は増えません。進路の指導に関する家庭や担任の先生のお考え方もあり、高校生の「意思」の創発はなかなか簡単ではないのです。そのことの難しさを改めて実感させられた1年間でした。

5. プロモーションをテーマとした「意思ある学び 2014」

ひとづくり(人材育成)の難しさ、とりわけ高校生の「意思」を創発することの大変さの話はひとまず終え、まちづくり(地域活性化)の観点からする「意思ある学び 2014」の位置づけなどを説明しておきます。換言すれば、なぜプロモーションをテーマとしたのかということです。

「意思ある学び 2012」で明らかにしたように、飯山地域の知名度の低さが「観光まちづくり」の大きな障害になっており、この点をどうにか改善することができないかという問題意識がまずテーマ設定の背景にあります。「意思ある学び 2012」では、その知名度の低さをブランド観光地や発信力のある人々と組むことでカバーしようとするものでしたが、本来それは望ましいものではありません。高校生のSAKEツアーの提案にしても、「千曲川ワインバレー」というブランド観光地の形成に深く関わるキーマンが玉村豊男さんという発信力のある人物が存在することが前提であって、このように他地域のブランド力に依存する形の構想です。しかし、そういつまでも、「他人のふんどし」で相撲をとるといふ訳にはいかないということです。

そこで、飯山地域としても、地域のブランド形成をすすめるために、魅力的で効果的な情報発信をすすめることが必要だと考えました。これが研究助成を申請する時に考えていたことです。しかし、申請が認められ、いよいよプロジェクトを始動させようという時、新たな問題が浮上りました。いわゆる「消滅自治体」の問題です。日本創成会議が昨年5月に発表した衝撃的なレポート(以下、「増田レポート」と略称する)では飯山地域4市村は例外なく2040年には消滅するとされ、飯山地域の人口減少問題(人口流出問題)の深刻な実態を再認識させられました。こうなると、新幹線の誘客効果(以下、「新幹線効果」と略称する)による交流人口の拡大が移住・定住につながるのを待つ余裕はなく、より直接的な「交流まちづくり」に主軸を置いた移住促進のとりくみが重要です。

ここで思い出すのが、7月の地域活性学会で発表をする際に訪れた網走市です。中国映画の舞台となり、中国人観光客の急増ぶりで注目され、インバウンド観光の成功例とされてきた網走市ですが、実際に訪れてみると市役所の向いの私立高校は閉校となり、中心市街地は月曜日だったということも

ありますが、多くの店舗がシャッターを降ろして閑散としていました(「観光まちづくり」の優等生であっても、「増田レポート」では若年女性の減少率が51.2%とされ、「消滅自治体」の問題とは無縁でないことが数字の上からも確認されています)。網走市のように観光振興により交流人口が拡大しても、それがそのまま人口減少問題(人口流出問題)を解決してくれる訳ではないのです。若者の人口流出に関して、応対して下さった観光課長は、管轄外のこととしながらも、東京農業大学オホーツク校という重要な知的資源を活用して、網走市内で起業するような人材を育てていきたいとお話しになっていました。こうして起業支援も含めて若者の移住促進や流出防止に力点を置く「交流まちづくり」に政策の主軸を移す自治体が増えてきており、網走市も転換の途上にあるように感じました。

このような問題意識から、調査・研究活動をすすめる上で2つの視点をもつことにしました。まず他地域と差別化できる魅力的なプロモーションのあり方を考えること。そのために、飯山地域でしか出会えない魅力的な「ひと」に焦点をあてた情報発信の方法を調査・研究します。既にコミュニティ・トラベル・ガイドというシリーズの交流ガイドブックが発売をされているので(『海士人』『福井人』『三陸人』などが発売されており、いずれも好調な売れ行きだそうです)、それを飯山地域を含む千曲川(信濃川)の上流から下流までの広範な地域を対象として作成することができないかと考えました。仮称『しなのがわ人』の構想です。

次に、若者の人口流出に歯止めをかけることにもなる中学・高校生のローカル・アイデンティティ(地元愛)を育むようなプロモーション。そのためには、飯山地域にも存在するはずの地域内で変革にとりくむ人々(以下、バカモノと略称します)やヨソモノを発掘し、交流まちづくりのイベントを開催するなどして、中学・高校生や飯山地域をフィールドに調査・研究活動にとりくむ大学生など(以下、ワカモノと略称します)の「意思」の創発をすすめることが重要だと考えました。

このようにプロモーションといっても観光パンフレットやWebサイト(HP)をどう作るかというレベルのお話ではなく、飯山地域のブランド形成につながる「差別化コンテンツ」の発掘と発信や交流まちづくりイベントの開催などに視点を置いたものであることを強調しておきたいと思います。仮に「新幹線効果」で飯山地域を訪れる観光客が何倍かに増えたとしても、それがそのまま人口減少問題(人口流出問題)を解決してくれる訳ではないのです。

6. バカモノとヨソモノの発掘をすすめたローレル夏期大学

具体的な活動内容の報告です。夏期休業中の8月に大学生(「意思ある学び 2012」参加生徒)3名を招いてローレル夏期大学を開催し、飯山地域に居住し、飯山地域の「希望創出」に積極的な役割をはたしていると考えられる人々(以下、「意思ある人々」と略称する)を発掘して取材しました。より正確には飯山地域4市村と千曲川(信濃川)を通じて飯山地域につながる新潟県十日町市などに居住する右表のようなバカモノやヨソモノの方々です。選定に際しては「増田レポート」が「消滅回避」のためにとりくむべき施策として「若者や女性が活躍できる社会」を創るべきだとしていますので、自らの仕事を通じて「若者や女性が活躍できる社会」を創ろうと積極的に行動している人々を選んで発掘しました。

調査・研究活動をすすめる前は、どこにどのような「魅力的な人」がいるのか、誰に聞いてもよく分からない状況でした。しかし、調査・研究活動により飯山地域にも「意思ある人々」が少なからず存在することが判明し、飯山地域にしかない「魅力的なひと」として積極的に情報発信すべきという結論を得ました。このように仮称『しなのがわ人』の構想実現に向け、たいへん意義のある調査・研究活動ができました。

飯山市	木内マミさん(ひぐらし農場) 西川遼馬さん(斑尾高原山の家) 滝沢篤史・弥生さん(やよい農園) 野口 豪・樹里さん (城山荘ボナペティファーム)
木島平村	山川春菜さん(地域おこし協力隊) 馬場千遥さん(地域おこし協力隊)
栄 村	鎌水 愛さん (信州アウトドアプロジェクト)
越後妻有 地域	Studio-H5(スタジオエチゴ)さん 日野正基さん (中越防災安全推進機構 復興デザインセンター)



7. 交流まちづくりイベントを体験的に調査した学生委託研究

大学生3名には、ローレル夏期大学の終了後も、委託研究という形で調査・研究活動をお願いしました。バカモノ、ヨソモノとワカモノの交流まちづくりイベントを展開するなど「交流まちづくり」に政策の主軸を移してとりこんでいると伝えられている先進地域に派遣して、そのとりくみを体験的に調査してもらうのが目的です。大学生は合せて6つの地域の交流まちづくりイベントに参加して、その内容を報告してくれました。彼らのレポートは飯山地域の「消滅回避」の一助になればと考え、この2月より順次、飯山地域のローカル新聞に掲載していただくことになっています。

調査した大学生によると、高校生の「意思」の創発に関わる海士町(島根県)と隠岐島前高校、和気町(岡山県)と和気閑谷高校の事例が、最も参考になるとのことです。いずれもヨソモノを町役場の職員として採用して高校に配置し、そのヨソモノがまちづくり(地域活性化)に強い関心をもつ「まちづくり系大学」のワカモノを呼び込む交流まちづくりイベントを実施しているという例です。それぞれの高校の生徒は訪れた大学生との交流により「意思」が創発され、ローカル・アイデンティティ(地元愛)も育っていくはずで、交流まちづくりイベントは、「まちづくり系大学」のワカモノを呼び込むための良いプロモーションのとりくみとなっています。



8. ようやく動き出した高校生のローレル文化講座

このように大学生が前面に出ることになったのは、高校生の「意思」の創発が上手くいかず、手間取ったからです。しかし、この問題も年明けになるとついに解決して、高校生(「最後の飯山北高生」)による探究活動がスタートしました。待ちに待ったローレル文化講座の始まりです。

講座の最初の試みは、Webサイト(HP)を活用した魅力的で効果的な情報発信の方法を専門学校の先生から学ぶことです。そこで、岡学園トータルデザインアカデミーを訪れ、Webデザインを担当する伊藤深志先生からWebサイト(HP)による情報発信のしくみや方法を教えていただきました。



飯山市のなべくら高原でハーブを育てている「農業女子」がいる。父の順一さんと一緒に「ひぐらし農場」を営む木内マミさんだ。

4年前に膠原病を発病した木内さんは、未だ有効な治療法はないというこの病気を治そうと、さまざまな治療法を試したという。そんな彼女が最後に辿り着いたのがハーブだった。以来、自分の体調を整えてくれるハーブを自分の手で作り、同じような病気に苦しむ人に分けてあげたい、そんな想いから「ひぐらし農場」でのハーブ栽培を始めた。今では14種類のハーブを栽培し、自らブレンドしたハーブティーを近くの「なべくら高原 森の家」のラウンジに提供して、飯山を訪れた方々に飲んでもらっている。私たちも飲ませていただいたが、人工香料の臭いが鼻をつくような「ハーブティー」とは全く異なる、自然そのものの香りと味わいが素敵な真正正銘のハーブティーだった。

自分を健康にしてくれたハーブとハーブティーの魅力を日本中に広めたい。そのためにハーブティーを気軽に楽しめるカフェ、そして病気に苦しむ人々が気軽に立ち寄って交流できるようなコミュニティスペースを飯山市内につくりたい、というのが現在の彼女の夢だ。ハーブティーを飲むようになってからは風邪もひかなくなり、周りの人よりずっと健康になったと語る彼女は、きっと素晴らしい「健康アドバイザー」になるに違いない。



伊藤先生によると、魅力的な Web サイト (HP) と閲覧する人が感じるのは、コンテンツの良し悪しだけでなく、デザイン感覚がかなり影響するというので、参考になる Web サイト (HP) を紹介していただきました。(一社)いなかパイプが運営する「いなか仕掛人」というページです。画面上に配置された「ひと」のアイコンをクリックすると仕掛人を紹介するページが表示され、その「ひと」に関する詳細な情報が入手できます。このような優れたデザイン感覚の Web サイト (HP) はやはりプロでないと作成するのは難しいということでしたが、仮称『しなのがわ人』の Web 試行版を作成する際のイメージはつかめましたので、新年度になります。桂蔭会の Web サイト (HP) を更新する際には、デザインの専門家の支援を受けながら、実際に Web 試行版を作成してみる予定です。

一方、効果的という点からは Web サイト (HP) の閲覧者に関する情報を分析し、それを情報発信に活かすことが大切であり、「アクセス解析」と称するこの情報分析は、無料のソフトウェア (グーグルアナリティクスという誰でも簡単に入手できるソフトです) を使って簡単にできるということでした。コンテンツを並べただけで終わりという安直な Web サイト (HP) が多いと思われるだけに、この情報分析の手法はたいへん画期的なものであり、高校生も感動して分析操作に見入っていました。

9. これからにつながった成果報告会とワークショップ

実際に動き出したことで「意思」が創発し始めた高校生は、大学生の支援を受けながら、飯山地域のバカモノ、ヨソモノを発掘して取材する活動に参加するようになり、スタートが大幅に遅れたローレル文化講座ですが、現在は着実な歩みを重ねています。

ところで、この高校生の「意思」の創発に関して、「地域課題」に向き合うキャリア教育を特集したリクルート社の進学情報誌『キャリアガイダンス』の昨年 10 月号は、先進的实践に共通する成功のポイントとして「課題意識を持つ地域の人との出会いをセッティングする」「校外に向けた発表・提案の場を設ける」「生徒を信頼し、企画の実行・実現を後押しする」の 3 点が重要であるとし、また活動の展開に合わせて下図のようにポイントを押さえた指導が必要としています。「意思ある学び 2014」では、ローレル文化講座に参加した高校生は「飯山を何とかしたいという気持ちはあっても、それを口にする雰囲気ではなかった」と参加を躊躇してきた理由を述べていますが、こうした彼らの躊躇いの気持ちを転換する上で大きな転機となったのが、交流まちづくりイベントで出会った「意思ある人々」との交流でした。実は昨年 11 月末に開催された小布施若者会議にスタッフとして参加する先輩大学生の付添という形で、特別に参加を認めていただいたのです。「新幹線効果」に期待する声が強飯山地域では、「課題意識を持つ地域の人との出会いをセッティングする」ということが困難な状況でした。そこで、「交流まちづくり」に政策の主軸を移してヨソモノの呼び込みに成功しつつある小布施町の力をお借りする形で、高校生の「意思」の創発を図ったのです。年明け 2 月からローレル文化講座がどうにか開催できたのは、実際のところは私共が今回のプロジェクトを通じて培ってきた各方面の「意思ある人々」とのネットワークによる支援があったからでした。

こうしてローレル文化講座に参加することになった高校生が、現時点で最もとりくみたいと考えているのが、仮称「ワカモノ未来会議」と称する交流まちづくりイベントです。バカモノ、ヨソモノ、ワカモノ、そしてその支援者らが集まり、飯山地域の「希望創出」について語りたい、そんなことを考え始めています。「2020 年の飯山地域をどうする？」をテーマに地域内外の「意思ある人々」との交流にとりくみたいというのです。

そこで、こうした彼らの「意思」を形にすべく、新幹線飯山駅開業を 1 週間後に控えた 3 月 8 日に「意思ある学び 2014」の成果報告会を開催しました。成果報告会は飯山地域のこれからの考える上で重要な提言の場であると位置づけ、飯山地域 4 市村の首長の他、飯山市議会議員にも参加を呼びかけました。自治体職員の参加が少なかったのが残念でしたが、飯山市民を中心に 30 名超の参加があり、全国の先進的事例を参考に飯山地域の「希望創出」を考えるワークショップにとりくみました。飯山地域のこれからにつながる学習交流の場となりました。

